

成功する養豚養鶏経営 (二)

長 田 家 広

経営篇 (続き)

四 統一品質のものをつくることである

「ぶた」も「にわとり」も商品であるからには、良い品物をつくらなければならないことはもちろんであり、品質が均一なものをつくるようにしなければならない。

脂肪の厚くかかったものや、やせたものを出荷しては、信用ある品物としては受取れない。箱入り靴下を一ダース購入した所、なかに一足でも破けたものが入っていたら、すぐに商店に返品するように、畜産物においても一団地から出荷されるものが、均一に出荷されるものでなければならぬ。

ためには一集団の各農家の技術が同程度であり、しかも高度な技術をもった集団でなければならぬ。

養鶏技術篇

一 成鶏は卵を産むのにどれ程の飼料(実物)をつくらなければならないか

産卵している「にわとり」が産んだ卵の重さに対して飼料(実物として換算して)をどれ程つくっているかを、よく調べてみよう。

「にわとり」も「白色レグホーン」や「一代雑種」や「輸入鶏種」によって、小玉を産んでいる期間やら、中玉から大玉に移る期間が違っている。

五〇%以下の小玉を産む期間が長い程「もうけ」が少ないので、早く中玉(五四%)や大玉(六〇%)になる品種を飼養するように考えていかなければならない。

産んだ卵の総重量に対して、飼料の量が三・〇倍か三・五倍程度になることが望ましい。

現在道内で飼育されている「にわとり」の中では二・六倍程度のよい品種もいる。

卵を産むのに少しでも少ない飼料で大きい卵を産むことが経済的であるし、早く大きい卵を産む品種を飼育することが(もうけ)にもなる。この卵の重量に対して飼料の量がいくらになつていのかをみるのは、飼料の要求率といっている。

一方では産卵率が六〇%以下にさがってくると、卵を産まないで飼料ばかりくつて生きている「にわとり」が四〇%になることになるので、勢い飼料量は総卵重に対して三・五倍以上になってくるので、産まない「にわとり」は淘汰してゆき、産卵率をあげ

るとともに、飼料の消費量にも無駄のない管理にしていかなければならない。

ために飼料要求率が少なくてすむ品種と、小玉を産む期間の少ない品種を選び、この品種の特性を生かしていくように淘汰もしていかなければならない。

二 どんな品種を選ばべきか

白色レグホーン種は多産鶏であるが、神経質であるし、湿度には弱いし、産卵開始してから中玉に移る期間が、他の品種に比べて割合に長い。概ね三ヵ月位はかかっている。

しかし体が小さいし多産鶏であるから、飼料は余り喰い込まないで多く産卵するから、淘汰を正確に行ない病鶏を出さなければ、飼料の要求率は低いので、経済的というが、中玉に移るのに小玉の期間が割合に長いことから、ここでの損がでてくる。

この「白色レグホーン」にかえて大型の「にわとり」にすると、強健であるが体が大きいだけに飼料を多く喰い込んでしまう。とすると、産卵率がさがると直ぐ飼料の消費量はふえて、要求率が高くなって損をする。

ために肉用とかけ合せた一代雑種は、鶏にする時は肉用として重量がかかって高く売れるが、生存中の喰い込み量自体が多いので、高い飼料を与えると、例えば妊当四〇円以上の飼料を与えているとすると、一日一羽当りの飼料代が五円五〇銭程度になるので、産卵率を八〇%程度にして鶏卵の一個当生産原価が八円六〇銭程度になるので、周回な経営管理をしていないと、赤

字になり易い。

「肉とり」として高く売れるとはいって、定期的なきまった数量が「肉とり」として販売出来るような条件が、地元において揃っていない限り、一時的な肉の消流となって、経営としては非常にやりにくい。「肉とり」の消流が計画的に出来るようになっていけば、ブローラー経営をやって「若とり」で肉を出荷した方が、経営的には有利である。

以上のことから考えてみると、中玉を早く産むようになる「にわとり」で、飼料を多く喰いこまないような中型鶏で、強健で湿度に強い品種を選ばねばならない。

餌付けして一五四日目で産卵を開始し、初産日令時の卵重が四五・五瓦のものが、一ヵ月程度で中玉になる「にわとり」がいる。

こういう品種をさがさねばならない。

三 「ひな」購入にあたって「ひな」代をどう考えるか

「にわとり」を五羽・十羽飼育するのではないし、一〇〇羽・五〇〇羽・一〇〇〇羽と飼育するので、数多く「ひな」も導入しなければならぬ。

「ひな」導入資金も少々の額ではない。

かつては安い「ひな」は買ってはいけないうと言っていたし、今日でも必ずしも安い「ひな」を導入してはいけないう。「シタビナ」といって種卵が充実していないものから出てきた「ヒナ」が、(おまけ)として購入数量に加えて持こまれてくると大変なことになるし、こういう「ヒナ」は当然安



く売ってくる場合もあろう。

これでは産卵率どころか、産卵するまでに弱い「とり」になって、生存もあぶなくなってくるので、安い「ひな」を買うべきではないが、また高い「ひな」を購入すべきでもない。

ばく大な資金を素ひなにかけて、しかも大びなまでに養うのに一羽五六〇円程度の経費がかかってくるので、大変な資金量になってくるので、高からずまた極端に安くない「ひな」を購入しなければならぬ。大型の肉用種をかけないで、中型鶏をかけた一代雑種でも、初生ひなで、一羽当り七五円程度から九〇円程度で、信用のある孵卵場のもので出廻っている。

「ひな」代とともに経営技術上考えなければならぬことは、種卵をとっている親とりが一年鶏の種卵であるが、四五瓦程度五〇瓦以下の種卵で孵化したような「ひな」

を出している鶏卵場のもは、出来るだけ購入してはいけない。とくに種卵が小玉のもので孵化した「ひな」よりは、中玉以上の種卵のものから出た「ひな」がよろしい。二年以上鶏を一カ所で沢山飼育している処で、專業的に種卵をとったり、人工授精で種卵をとっている孵卵場のもを出来るだけ選ばなければならぬ。

しかしこの孵卵場の「ひな」が白血病が出たり、コクンジムの発生が多いのでは、また養鶏経営上からは困ることになるので、導入した「ひな」から昨年白血病が多く出たような孵卵場の「ひな」はおことわりして、別の孵卵場に切替えねばならない。

四 「ひな」の育成率は何%を期待せねばならないか

以上述べてきたことから品種価格などが判ってきたことと思うが、これらのことを考えて導入すると、少なくとも「ひな」の育成率は九〇%以上には必ずなる。ならない場合は育成管理技術が悪いことになる。

しかしながら九〇%以上育成されても、育成中に弱い「ひな」に育成してはなんにもならないので、素ひなを厳密に行なって強い「ひな」に育てなければならぬ。

また育すうセンターなどで大びなまで育成して販売されるものも、育成率が九〇%以上の良い成績をしめしているセンターでも、弱い「ひな」が多いセンターであつてはいけぬ。

大びなを購入する場合にも、健全なものを選ぶ必要があるし、周到な管理を行ない、良い立派な管理者が育ててくれた大びなを

購入しなければならない。

こういう条件になるように、そのセンターの運営も進めってもらうよう大きく要望をすべきである。

五 損益書を分析してみよう

一、〇〇〇羽飼育しているある養鶏家の損益書をみると、次のようである。

鶏舎坪当り金額 八、四七〇円
一羽当り鶏舎施設金額 五八二円
年間償却金額 五八円
になっていて、鶏舎には余り経費をかけていない。ここまでは非常に経営がよい。しかしながら次の点をみてみると
育すう施設一羽当り 一、一〇〇円
償却費一羽当り 四五円

即ち現在は一、〇〇〇羽常時飼育をするための育すうがなされておらず、年四回の育すう計画という淘汰補充が資金的にうまくいっていないが、これは前年と前々年の二カ年に白血病で多くの「ひな」を倒したために、資金が困窮となって、本年は充分に補充することが出来なくなり、一、〇〇〇羽飼育が出来ず、平均七八〇羽の成鶏の飼養であることから、一羽当りの育すう施設費償却費となっており、個人の育すう施設は一羽当り六〇〇円程度に、償却費は三〇〇円程度に下げなければならぬ。

しかも
飼料要求率 三・七三
成鶏一羽当り借入金額 一、六三五円
償還金額 四四七円
になっており、二カ年のつまづきは、つな

ぎ資金や、一、〇〇〇羽までに増養するまでの施設再投資借入額にまで、資金繰りを困難にしていき、三カ年で養鶏の基礎づくりをしていかなければならないのに、五カ年にまで立直りが遅れていっているもので、成鶏一羽当りの借入金額は一、〇〇〇円程度、成鶏一羽当りの償還金額は一〇〇〇円以内で止める経営にするためには、この「ひな」導入に対する目のきき方と、育成管理技術が劣っていたこと、これらが経営を苦しめた原因であるが、併せて飼育要求率が三・七という高い率になっていることは、品種の選び方と考え方がよく判っていないことが示している。

この経営を以上の事柄を総合すると、成鶏舎は簡単に自己の資材と労力できくりあげて、固定資本に金をかけてはいけないということを忠実に守っているものの、この成鶏までにする迄の技術や経営の仕組の中で、「ひな」一つを取巻く諸条件の一つの歯車が廻らないと、こういう結果を生むことになるものである。

しかし飼料は特別に安く購入しているので、飼料要求率が高くて、経営バランス上では左程困ることにはなっていないが、もし飼料の高いものを買っていたら、この農家は赤字をつくってしまったであろう。

現在一時間一〇六円の所得になっているが、「ひな」一つの問題が解決されてうまくいくようになると、この経営は万々歳である。

六 飼料は標準通り喰い込んでいるだろ

うか

高い餌だからといって食べさせてやらな
いわけにはいかない。

喰い込みのよい程能力を發揮するもので
あるから、「一代雑種」「白色ングホーン種」
などの標準量を喰い込ませるように管理を
しなければならぬ。

飼料要求率が真に喰い込んで、それだけ
の能力を出してくれば、三・七のものが三・
〇になりうるわけであるから、どうしたら
よくたべるかをよく考えてみよう。

ケージに飼われている「にわとり」は実
に退屈していると思う。自由に遊んで廻る
わけにはいかないし、早く陽がくれて暗く
なるから、運動をしないままであらうと餌を
たべること自体、普通に考えてみると我々
人間では腹もすかないかもしれない。

仕事をし畑まで歩き、疲れると空を仰い
で浩然の気を入れて、夕方の食事をうまく
たべよう人間は考える。

居候の人間はやはりさもない、考えをもっ
ているので、出来るだけ働かないで朝もお
そく起きて、食事の時は人一倍くう。

卵を産まない「にわとり」は居候と同じ
だから、他所にいつてもらうかにしなけれ
ばならない。

狭い安定の悪いような所で、しかも暑か
ったり、冬は寒かったりの気温の変化の著
しい所や、湿度の高い所に一カ所に運動も
しないで困われているのであるから、やは
り消化のよいもので、「にわとり」の体にな
り卵になる効率のよい餌を与えたいもので
ある。

その効率のよい餌といっても、無暗に高
い価格のものを購入すべきでもない。

しかし「にわとり」に餌を与えているよ
りも、床に多く与えている管理者が多い。
「にわとり」がはねとばして飼料桶より飼
料がとび出すのであれば、飼料桶を考
えよ。

鶏舎に卵をとりに入るといって考え、一週
に一回の排糞掃除の時に鶏舎にいくとい
う考えや、一日に三回きまった時間に餌を
やるために鶏舎に行くという考え方以外に、
標準量をなんとか喰ってこれという考え
方、願い方、祈り方で鶏舎に入る考え方を
心掛けてもらいたい。

朝餌をやって水桶を綺麗にしてやる時、
ケージの前を通る時、排糞の状態をみる時
以外は、鶏の外観を見ながら、手は飼料桶
に入れて、飼料をかきながら通ると、
鶏の目の前の餌が目につく感じが違っ
て、「にわとり」は餌をつつくものである。

ケージの前を通る時は出さるだけ飼料桶
に喰い残している餌をかきまぜて、喰い込
ませることだ。粉餌のものでも魚粉が桶の
下の方に残っていることが多い。

「にわとり」はやはり好きなものから喰べ
るので、とうもろこしなどを喰い込んで蛋
白質が喰い残される。

卵集めや産卵記録は子供さんがしても、
餌を与えること、餌の喰い残り状況は必
ず経営者がみるべきだ。

子供に加勢してもらうことは結構だし、
子供の労賃は必ず支払ってやるべきだが、
餌付喰い込みは養鶏経営のポイントであ

り、急がしいばかりにえさを土に吸わせる
必要はない。

最近立派な国道ができて、一米何万円も
かかっている道路だとよくきくが、鶏舎
の土間も黄金道路までにはいかないが、塵
も積れば山となるといって、毎日一羽当り
三〜四銭の金を流していることになり、鶏
舎の土間も十年位のうちには黄金の土間と
なりかねない。

この土間におちたえさがまた「ばいきん」
の繁殖源にもなることから注意してほしい
ものである。

陽が当たって暑すぎても餌はくえない。「に
わとり」は尻で暑さを調節している。犬は
舌をハアハアと出して暑さを調節する。「に
わとり」は舌が小さいし、ヒビのように長く
出てこない。毛におおはれて裸の部分、
肛門を開けてここから暑さを出すので、肛
門を何時もあけていると脱肛になる。人間
でも下痢を二〜三日続けると、けつはいた
くなる。

「にわとり」にしても何時もけつをあける
ような暑さではジになってしまし、暑け
れば水を飲む。便が軟くなる。その結果は
ジになり易い。すると餌はくえない。南側
を真うしろに背負っているケージ舎が多
い。

この鶏舎は必ず夏に南側の「にわとり」
は餌がくえないし、北側の「にわとり」は
冬には「とうもろこし」ぬか類の餌をうん
と喰って、体の暖気をとろうとすることに
精一杯で、卵を産むどころの騒ぎではな
い。

餌桶に手を入れて歩くことも必要だが、
鶏舎の建てる方向は一たん建ててしまおうと
おいそれと動かすことも出来なくなるの
で、建てる前の鶏舎の方向をよく考えて、
「にわとり」がえさをよく喰い込める条件
を考えてやらなければならない。

七 配合飼料以外にえさを与えるべきか

市販されている配合飼料以外に、自己の
経営でとれたからといって、屑米やとうも
ろこし、燕麦を与えている人も多い。

大体市販されている飼料は効率を考
えて、種々研究してつくっているものであ
る。しかるに喰わせようと考えて自給飼料
を与えることは結構であるが、現在与えて
いる配合飼料を喰い残しているものはそ
のままとして、「にわとり」の目先をかえてや
るように飼料桶のえさをかきまぜて歩く
という手段もせずにその上にひきわりの「と
うもろこし」を投げてやっている。「にわ
とり」は澱粉質のものを過剰に喰い込んで
いくことになって、脂肪がのって卵を産ま
ないことになっていくので、自給飼料を配
合飼料に加えてやる時は、季節や「にわと
り」の状況等をよくみて、加えてやらねば
ならない。

(道立道南農業試験場専門技術員)

